

両宋における書院祭祀の変化：祭祀空間と祭祀対象 を中心に

簡，亦精
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/1462276>

出版情報：中国哲学論集. 39, pp.65-85, 2013-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

兩宋における書院祭祀の変化

— 祭祀空間と祭祀対象を中心に —

簡 亦 精

一 書院と廟学制度

北宋初期、書院は不足がちな官立学校を輔佐する役割としての新たな道を展開し、唐代書院では見られなかった祭祀という機能が加わった。しかしながら、初期の書院祭祀には独自の制度がなく、基本的に官学の廟学制度を受け継ぎ、孔子とその弟子の像を作り、嶽麓書院にしても白鹿洞書院にしても祭祀対象は先師・先賢を中心とした。^①

廟学制度とは学校内に儒家的祭祀空間である「聖廟」(文廟)が設置され、かつそこで祭祀儀礼(学礼)が行われる学校制度を指す。^② 廟学制度の「廟」とは孔子廟(孔子と共に先賢・先儒が従祀される)を指し、「学」とは講堂(元・明以降は明倫堂と称される)を指す。^③ つまり、「廟」という祭祀空間と「学」という講学空間とによって学校が構成されるのである。

廟学制度の成立に関しては、東晋の孝武帝が太元十年(三八五)に国子学(中央官学)に廟を建てて孔子を祀ったことを廟学制度の嚆矢とする研究がある。^④ 高明士氏の論考「廟学制的建立与实施」^⑤によれば、北魏の孝文帝は太和十三年(四八九)に中書学(中央官学)に孔子廟を造らせており、南梁の武帝は天監四年(五〇五)に国子監(中央官

学)に孔子廟を造らせた。また、北斉と北周は北魏の影響を受け、廟学制度を取り入れた。北斉の場合は国子寺に孔顔廟を造っており(『隋書』卷七・九、礼儀志二・四)、北周の場合は積奠を二回(文帝大統十三年・宣帝大象二年二月)行ったという記録があった(『周書』卷四七・冀備伝、同書卷七・宣帝本紀)。

以上の事柄を踏まえると、最初孔子を祀る廟を設置したのは中央官学のみということが分かる。州学・郡学等のような地方官学が廟学制度に従い孔子を祀るようになったのは、北斉の文宣帝の天保元年(五五〇)とされる。また隋初の学校制度は北斉の学校制度を基にしたため、当然孔子を祭っていたと推測される。『隋書』卷九、礼儀志四に、

隋制、國子寺、每歲四仲月上丁を以て先聖先師を釋奠し、年別に一たび郷飲酒禮を行う。州郡の學は則ち春秋仲月を以て釋奠し、州郡縣も亦毎年學に於いて一たび郷飲酒禮を行う。

とあるように、中央官学は年に四回、積奠の礼を以て先聖と先師を祭祀する。また、毎年別に郷飲酒礼を実施する。一方、地方官学の州学と郡学は春と秋の二回だけ、積奠の礼を行い、州・郡・県学もまた毎年郷飲酒礼を実施するよう規定している。地方官学の県学に孔子廟を造る許可が下りたのは唐の貞觀四年(六三〇)のことである。元の徐碩『至元嘉禾志』卷七、学校に、「廟は以て先聖を崇め、學は以て人倫を明らかにす。郡邑廟學、大いに唐に備わる。」とあるように、中央官学のみならず、地方官学にも孔子を祀る廟を備える決まりはそのまま定着し受け継がれることとなり、宋・元・明・清代の学校も基本的にこの制度を沿用した。

上述のように、廟学制度は「講学空間」と「祭祀空間」によつて構成されている。これは、官立学校の建築スタイルの基本となる。『大唐郊祀録』卷一〇、文宣王廟に、

其の廟は長安子城安上門街道東務門坊に在り。洛陽には長樂坊に在り。其の廟は屋四柱七間、前面兩階、堂高三尺五寸、宮垣之を周る。南面は一屋三間、外に十戟有り。東面は一屋一門。其の太學講論の堂は、廟垣の西に在り。

とある。孔子を祀る廟の西側に太学(中央官学)の「講論之堂」がある。高明士氏はこれを現存する「廟学建築」に関する最古の文献であると述べ、唐代では「左廟右学」という配置が主流であることが窺える。要するに、建物の背

面が北の方向で、正面が南の方に向いた場所は東を左とし、西を右とするのである。¹²次に同氏によつて最も古い地方志とされる敦煌史料『沙州都府督図経』卷第三を引用し、州学・県学（地方官学）にある「廟」と「学」との位置關係を説明しよう。

州學

右、城内に在り、州の西三百歩に在り。其の學の院内、東廂又先聖太師廟にして、堂内に素（塑）の先聖及び先師顔子の像有り。春秋の二時奠祭す。

縣學

右、州學の西に在り、院に連なる。其の院中東廂に先聖太師廟有り、堂内に素の先聖及び先師顔子の像有り。春秋の二時奠祭す。¹³

東を左とすると、州学と県学（地方官学）は太学（中央官学）の「左廟右学」と同じスタイルとなる。塑像を置き、祀る対象は主に孔子と顔子となる。左を重んじて、南の方に向くのは正しい礼とされるため、尊ぶ聖廟を左に置いたのではないかと考えられる。

しかしながら、この唐代で採用された「左廟右学」の建築スタイルは受け継がれることがなく、「左学右廟」・「前学後廟」・「前廟後学」の配置も見られ、例えば南宋では、唐代と正反対の「左学右廟」を採用したことに對し、次の『朱子語類』卷九〇、礼七、祭に見られるような議論があつた。

問う、大成殿は又却て學の西に在り、是れ尊右の義莫きや否や。曰く、未だ初意は如何なるかを知らざるも、本朝因りて舊制に仍り、反て更に率略となり、之を唐制に較ぶれば、尤も理會没し。唐制尤も近古の處有れば、猶お條理の觀るべき有り。¹⁴

唐は「左廟右学」を採用するが、南宋は「右廟左学」を採用したことについて、高明士氏は「唐・宋の廟の位置が異なるのは、まさに二代の尊尚の差異を表わしているのかも知れないが、廟の所在を尊貴とするとということでは見解の相違はない。学校の敷地が廟の所在を尊貴とするのは、まさに学校の中心地が聖廟であることを表わしている。今

日まですっと、台湾に見られる伝統的学校（書院を含む）は、やはり廟の所在地を尊貴としており、韓国・日本に見られるものも同様である。」と指摘した。高氏は初めて書院と廟学制度との関係に関心を払った学者である。書院の「廟」と「学」の位置関係は「前学後廟」が最も多いという考察結果を出したが、その理由は必ずしも判然とせず、考えられるのは書院の建設の多くが風水を重んじる点と書院は官学のように厳しい規則に縛られていない点にあると述べる。

そうだとすると、北宋初期には地方官学が未発達であるため、唐代から累積されてきた書院の涵養能力は地方を教化する力を持つていることから、書院は教育機関として重宝され、書院を官学化するために「祭祀」という機能を付与させたという推論も妥当性を持つであろう。従来の研究では、書院祭祀が官学に従ったことを指摘するが、祭祀対象と祭祀空間（「廟」と「学」の配置）についてはまだ検討の余地がある。例えば、祭祀機能を持つようになった後、書院は廟学制度を如何に受容したのか、もしくは独自の廟学制度を発展させたのか、等の問題は十分に解明されていない。また、官学に倣い孔子とその弟子を祭祀すると考えられてきたが、弟子とは誰のことを指すのかを明確にすることによって、書院祭祀の特徴をより際立たせることが可能となる。本論はこれらの問題を解明することを目的とする。

二 祭祀対象―孔子とその弟子

従来の研究では、祭祀対象に著しく変化が見られる南宋時代が考察の中心とされてきたため、北宋の書院祭祀に関しては未だ不明な点が多い。そこで、まず北宋書院の祭祀対象とされる孔子とその弟子に関して、北宋時代に完成された「潭州嶽麓山書院記」の再検討から始め、書院で行われた祭祀の内容をより具体的に提示することと祀られる人物を絞り込むことを試みたい。ついで、同じく北宋に完成された陳舜俞の『廬山記』を取り上げ、白鹿洞書院と嶽麓書院の祭祀対象・祭祀空間の変化を中心に検討していくことにする。

書院は官学ではないため、祀典には書院祭祀の内容・対象・建築に関する規制がない。書院の祭祀に纏わる諸問題を説明するため、殆どの研究は明清時代の書院志を利用するが、それらの文献は充分に北宋時代の状況を説明しているとは言えない。そのため、北宋時代に完成された王禹偁（九五四～一〇〇一）の「潭州嶽麓山書院記」と陳舜俞（？～一〇七五）の『廬山記』に記された書院に関する記載は断片的ではあるが、重要な資料だと考えられる。

嶽麓書院は宋の太祖の開宝九年（九七六）に、潭州太守朱洞によって建てられた。唐が後梁に篡奪された後、中国は各地が割拠する状況に陥った。荆湖地域の回復は北宋開国四年後の乾徳元年（九六三）によりやくなされたものであり、当時この地に官学はなく、官僚である朱洞は僧侶が宮んでいた私塾の地を書院にした。

朱洞が潭州の太守に任命されたのは開宝六年（九七三）のことであった。官僚の支持を得た嶽麓書院は、制度的・規模的により大きく発展した。しかしながら、朱洞が離れるとともに、嶽麓書院は安定かつ有力な支援が途絶えてしまった。王禹偁の「潭州嶽麓山書院記」では、朱洞が離れた後の状況を、「諸生逃解して、六籍散亡し、弦歌音絶えて、俎豆観る無し。」¹⁷⁾と形容する。

咸平二年（九九九）、潭州太守李允則は衰廃する嶽麓書院を建て直そうと計画した。弦歌・俎豆等の描写から想像に難くないが、朱洞がいる時に恐らく嶽麓書院では祭祀活動が行われていた。碑文の続きに、

先師・十哲の像を塑し、七十二賢を畫き、華袞（袞）珠旒、縫掖章甫は、畢く舊制を按じ、儼然として生けるが如し。水田を闢き、春秋の釋奠に供せんことを請う。¹⁸⁾

とあるように、再建された嶽麓書院には先師・十哲の塑像と七十二賢の壁画が施された。春と秋に行われる釈奠のために水田を拓いたことも記載されている。『礼記』月令の記述に基づくと、釈奠は毎年二月と八月の最初の丁の日に行われる決まりである。釈奠の祭祀対象に関しては、『唐六典』卷四、「祠部郎中「員外郎」の条に、

凡そ祭祀の名に四有り。一に曰く天神を祀り、二に曰く地祇を祭り、三に曰く人鬼を享し、四に曰く先聖先師を釋奠す。¹⁹⁾

とあるように、先聖や先師と決められている。唐代の官学は大きく中央官学と地方官学に分けられる。また国の祀典

には大祀・中祀・小祀がある。例えば、中央官学で孔子を祀る場合は中祀を用い、地方官学で孔子を祀る場合は小祀を用いるというように使い分けている。

貞観二年（六二八）に中央官学に祀られる人物を「聖孔師顔」に決定した。唐において周公を先聖、孔子を先師とした時期もあったが、貞観二年より正式に先聖とは孔子、先師とは顔子と決めたのである。そして貞観四年（六三〇）に全国の地方官学に孔子廟を造らせ先聖孔子と先師顔子を祀るように命じた。『唐六典』巻四に、

凡そ州縣は皆孔宣父廟を置き、顔回を以て配し、仲春上丁に州縣の官は釋奠の禮を行い、仲秋上丁も亦之の如く(20)にせよ。

とある。それ以来、地方官学に孔子廟を設置することが許され、顔回（顔子）を配祀として孔子とともに祭祀した。祭祀の内容は『礼記』月令に従い、二月と八月の最初の丁の日に地方官吏によって積奠の礼が行われた。

ここで、一旦「潭州嶽麓山書院記」に戻ることにする。書院記には「舊制」に従うと書かれるが、「舊制」とはどの制度を指すのかが解明できていない。しかしながら、「畢く舊制を按ず（畢按舊制）」とはすべて旧制に従うことの意味であり、決して勝手に決めたのではない。時代から考えると、北宋初の太宗の命令によって作られた『開宝礼』に従った可能性が大きい。現在『開宝礼』が残されていないため、確認することができない。ただし、『開宝礼』は「開元礼」を元にして作られたものであり、それは『宋史』巻九八、礼志一の「開寶通禮」二百巻を撰するに、唐の「開元禮」に元づきて之を損益す(21)や『朱子語類』巻八四、「論後世礼書」の「開寶禮」は全體是れ「開元禮」、但略ぼ改動せり(22)という記事から窺い知れる。したがって、『開元礼』は「舊制」を知る重要な手掛りとなる。

『開元礼』巻第一、序列上、神位の条に、太学（中央官学）では二月と八月の最初の丁の日に積奠の礼が行われること、また祭祀の対象について、七十二人の弟子を「従祀」として先聖孔子と先師顔子とに合わせ祀ると規定すること、また同書の巻六九と巻七二、諸原積奠於孔宣父には、州学・県学（地方官学）で積奠を行う際には、先聖孔子と先師顔子の神席を設けると記される(23)。つまり、太学と州学・県学とは同様に積奠を行うが、祭祀の対象が若干異なるという相違がある。太学の祭祀対象は孔子・顔子及び七十二弟子である一方、州学・県学の祭祀対象は孔子と顔子のみである。

『宋史』卷二〇五、礼志八に、

至聖文宣王、唐開元末に、升して中祠と為し、從祀を設け、禮令攝三公行事す。朱梁喪亂して、從祀遂に廢され、後唐の長興二年（九三二）、仍りて從祀を復し、周の顯徳二年（九五五）、別に國子監を營みて學舎を置く。宋因りて之を増脩し、先聖・亞聖・十哲の像を塑し、七十二賢及び先儒二十一人の像を東西廡の木壁に畫かしめ、太祖親ら先聖・亞聖の贊を撰し、十哲以下は文臣に命じて分けて之を贊せしむ。²⁵⁾

とある（傍線は論者。以下同じ）。宋の國子監は唐の太学と同じ中央官学に属する。宋の國子監は再び回復された從祀を受け継ぎ、先聖孔子とともに至聖十哲の塑像を作り、東西廡の木壁に七十二賢と先儒二十一人の絵を描いた。『宋史』礼志八には、さらに、

『熙寧禮儀』は十哲皆從祀と為すも、惟だ州縣の釋奠は未だ載せざれば、請うらくは今自り二京及び諸州の春秋に釋奠するは、並びに『熙寧禮儀』に準じ詔して孟軻を鄒國公に封せんことを。²⁶⁾

とある。孟軻を鄒國公に追尊したのは、北宋元豊六年（一〇八三）十月のことである。この時点では、開封府学・河南府学・州学だけが十哲の積奠を実施している。時期を考えると、咸平二年（九九九）に再建された潭州嶽麓書院では、かりに州学の規定に従い積奠の礼が行われたとしても、その対象は孔子と顔子のみであつたに違いない。

書院に設置する塑像に関して見れば、「華袞」は王侯貴族の礼服を指し、「珠旒」は王侯貴族の礼帽にある玉の飾りのことで、両方とも高貴なものであり、身分が高い者の象徴である。一方、「縫掖」は儒者の召し物であり、「章甫」は儒者の帽子で、両方とも儒者を指す言葉である。同じく王禹偁によって雍熙三年（九八六）に書かれた「崑山県新修文宣王廟記」に、

乃ち素王を像しては華袞を被せ珠旒を垂れて、王者の制彰わし、乃ち十哲を狀しては章甫を冠し縫掖を衣せて、儒者の服備う。廟の興るや、既に彼の像の設けらるるが如く、又此くの如く粵に上丁の晨に、釋奠の禮を行う。²⁷⁾
と記される通り、「華袞珠旒」が孔子を指し、「縫掖章甫」が十哲を指しているのは明白である。潭州嶽麓書院の塑像は、崑山県文宣王廟の塑像と同様に孔子と弟子の十哲が設置されたのである。

北宋初期は官学を復興する余裕がなかったため、書院の力に頼ることにした。潭州に地方学校と孔子廟（文廟）の両方がないため、嶽麓書院が再建されたのである。崑山県（江蘇地域）に県学と孔子廟が再建されれば、地方の民に礼教を遂行することができる。崑山県文宣王廟では上丁の朝に積奠を行うことから推測すると、後に造られた潭州嶽麓書院も同じ思いを託され積奠を行っていた可能性が高い。

嶽麓書院にも崑山県の孔子廟にも、孔子と十哲の塑像が置かれた。周知の通り十哲とは孔子の十人の高弟である。この十人とは『論語』先進篇の「我に陳蔡に従う者、皆門に及ばざるなり。德行は、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓なり。言語は、宰我・子貢なり。政事は、冉有・季路なり。文學は、子游・子夏なり。」²⁸という一節に基づいたもので「四科弟子」とも呼ばれる。「十哲」はその尊称であり、開元八年（七二〇）に玄宗皇帝が与えた称呼である。

その経緯は、開元七年（七一九）李元瓘が上奏した議を玄宗皇帝が採用し、議を踏まえて、改正が施された。開元八年（七二〇）の詔書に、

顔回等十哲、宜しく坐像を為り、悉く従祀せしむべし。曾參は大孝にして、徳同列に冠すれば、特り塑像を為り、十哲の次に坐し、因りて七十弟子及び二十二賢を廟壁上に圖畫し、顔子亞聖を以て親（みづ）から為に贊を製り石に書し、仍りて當朝の文士をして分けて之が贊を為り其の壁に題せしめよ。²⁹

とあるように、顔回（顔子）を始めとする閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏の十人を「十哲」と称し、孔子とともに「十哲」の塑像（坐像）を「従祀」という形であわせ祀ることになり、開元八年（七二〇）から、孔子は主祀、顔子を含める十哲は従祀の形で太学（中央官学）に付設された廟で祀られることになった。

李元瓘が上奏した議に、前漢の文翁が蜀という僻地に学校を造った「文翁之壁」という話が引用される。僻地（當時、蜀は僻地とされている）にある学校すら「七十子」の絵をきちんと描いているのに、わが国の中央官学に附属される廟が「七十子」の絵を描いてないのはどういふことであろうと訴え、「壁に圖形し、兼ねて為に贊を立て、敦く儒を勸めんことを慮う。」³⁰と、壁に描くものに「七十子」が含まれる意義を説明した。なお、この議によって、中央官学の壁に「七十子」を描くことは許されたが、孔子とともに祀ることは許可されていなかった。

ところが、『開元礼』巻一、序列上、神位「仲春仲秋上丁釈奠於太学」の条には、「右新加七十二弟子之名」とある。仲春仲秋上丁の日に太学で行われる釈奠では、主祀は孔子で、配享は顔子とされるが、新たに従祀の「七十二弟子之名」を加えたと明記されているのだ。その書式を見れば、「孔宣父為先聖顔子為先師」を大字で表記し、続いて小字で孔子の弟子八十一人の名前を挙げている。名前の表記は『史記』（仲尼弟子列伝）に従っているが、人数は『史記』とも『孔子家語』（七十二弟子解篇）とも異なる。最初の九人の順番は冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・子路・子游・子夏・閔子騫である。この九人と先師顔子を合わせると、「十哲」のメンバーと同一である。

残った弟子は、曾參・高柴・宓子賤・公西赤・林放・樊須・有若・孔忠・琴牢・梁鱣・叔仲会・冉孺・曾点・陳亢・漆雕開・商瞿・司馬耕・子張・巫馬施・秦非・商澤・鄭国・公西蔵・公冶長・澹台滅明・原憲・蘧伯玉・公伯寮・原亢・燕伋・秦祖・冉季・公肩定・左人郢・公西輿如・公孫龍・任不齋・顔祖・南宮縚・鄒單・秦商・廉梁・步叔乘・邽巽・施常・顔之僕・狄黑・漆雕哆・泉成・顔路・顔噲・公良孺・公祖句茲・伯虔・榮旂・顔高・秦冉・申枨・顔辛・顔何・申党・公皙哀・后処・句井疆・曹卹・罕父黑・奚容蒧・公夏首・石作蜀・壤駟赤・漆雕徒父・樂欬となるが、その数は七十二人となる。『開元礼』が出来た時点で、「七十弟子」或いは「七十二弟子」がようやく孔子とともに釈奠の礼を享受することができるようになった。もともと、それは中央官学に限られた。

開元八年の勅令では、既に不動の地位を得た「十哲」を除くと、ちょうど七十二人になることは、ただの偶然とは考え難い。その上、開元二十七年（七三九）に「七十二子」を「伯」と追尊しており、この「七十二子」の地位が上昇しているのは確かなことである。宋の真宗の大中祥符二年（一〇〇九）に「七十二子」の中の六十二人を「侯」と追尊し、そして大観四年（一一一〇）に残り十人の公夏首・后処・公肩定・顔祖・鄒單・罕父黑・秦商・原亢・樂欬・廉梁を「侯」と追尊した。⁽⁸⁾七三九年から一〇〇九年までの間に七十二弟子の序次の変動はあったが、メンバーは変わっていない。

「潭州嶽麓山書院記」は咸平三年（一〇〇〇）に作られたものであるため、書院の壁に書かれた七十二弟子のメンバーは概ね確定できよう。これまでの分析を踏まえると、北宋初期に嶽麓書院には孔子と顔子・閔子騫・冉伯牛・仲弓・

宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏の塑像（坐像）があり、壁に七十二賢の絵が描かれていた。毎年春（二月）と秋（八月）の上丁の朝に孔子とともに顔子を積奠する。また、開元二十七年の「自今已後、兩京の國子監は、夫子は皆南面して坐し、十哲等は東西に列侍せしめ、天下の諸州も亦此に准ぜよ。」³⁴という勅令に従い、孔子の塑像を南に面して座らせ、十哲は東西に並べて孔子に仕える形とする。これが書院祭祀の原型となるのである。

三 書院の祭祀空間

靖康二年（一一二七）に北宋が滅亡した。一一二九年から一一三二年にかけて、潭州は戦火のただ中であつた。嶽麓書院は紹興元年（一一三一）に戦乱によつて廢墟となつたが、乾道元年（一一六五）に至り官僚の劉珙がその再建に取り掛かつた。『長沙府嶽麓志』卷之三、「旧志聖廟圖説」に、

宋初僅かに書院有るのみなるも、乾道の時に至りて劉安撫、書院の前に於いて始めて禮殿を創り、中に闕里の聖賢像を肖どり、列して七十子を繪き、前に泮池・苑門・櫺星門を為り、是自り晦菴先生更めて書院を建てること舊制の如くすれば、禮殿は則ち五間なり。³⁵

とある。確かに、咸平二年（九九九）潭州太守李允則が書院を再建する際、門屋・講堂・書樓・客次等の建物を作つたが、礼殿のようなものはなかつた。「旧志聖廟圖説」はさらに、「乾道に改元するや（一一六五）、湖南安撫劉珙、新院を創り屋を為すこと五十楹、内に禮殿を設け、聖像を肖どり、藏書閣を加え…。」³⁶と記しており、孝宗時期に書院が始めて教学空間と祭祀空間を別々に設置し、所謂官字の廟学制度を導入したことが分かる。なお、書院の前に初めて礼殿を創つたが、その配置は「前廟後学」である。

張栻（一一三三～一一八〇）の「嶽麓書院記」に「屋を為すこと五十楹、大抵悉く舊規に還り、闕里の先聖像を殿中に肖どり、列して七十子を繪きて藏書閣を（講）堂の北に加う。」³⁷とある。今回の再建は基本的に前の規制に従い、闕里にある先聖の塑像を模倣し礼殿の真ん中に安置して、七十弟子の絵を順次に描いた。それから藏書閣を講堂の北

側に増設したのである。

嶽麓書院を例として見ると、王禹偁の「潭州嶽麓山書院記」に、嶽麓書院は最初は講堂しかなかったと記されており、張栻の「嶽麓書院記」に初めて礼殿を造った記述が見える。つまり、初期書院（北宋時代）は祭祀も講学も同一場所で行った可能性が極めて高い。要するに、北宋書院の祭祀は官学の祀典を受け継いだが、官学の廟学制度のように講学空間と祭祀空間を分ける概念がまだ形成されていなかったのである。そうだとすると、書院が廟学制度を意識し始めたのは南宋乾道元年以降ということになる。

『長沙府嶽麓志』卷之三、「書院沿革（旧志）」に、「紹熙五年（一一九四）晦菴、湖南を安撫するや、學を嶽麓に興し、更めて書院を爽塏の地に建て、前に禮殿・泮池を列し、後に百泉軒有らしむること、堂室二層約百間なり。」とある。ここで注目したいのは「泮池」を造ったことである。古来、官学に属する孔子廟の前に泮池を造る習慣があったが、書院の前にも泮池を造るようになった。礼殿を孔子廟とは称さないが、祀る対象は先聖孔子である。朱熹が造った書院の祭祀空間は以前より充実された様子が見られ、書院の礼殿に泮池が伴っていることがわかる。但し、変化も見られる。張栻の「嶽麓書院記」には、十哲の塑像に関する記載がなく、恐らく、十哲塑像が置かれなくなった可能性が高い。このような現象は白鹿洞書院にも確認できる。

白鹿洞書院は嶽麓書院とともに北宋四大書院と呼ばれている。その歴史を遡ると、唐の李渤とその兄李涉がともに隠居をした場所に辿りつく。唐の宝曆年間（八二五～八二六）、李渤は江州の刺史となり、隠居する場所に台榭を建て、その周囲に池をともなった庭園を造り、洞名を「白鹿」にしたのが由来だった。宋の陳舜俞は「廬山記」に、

南唐の昇元中（九三七～九四三）、洞に因りて學館を建て、田を署して以て諸生に給するに、學者大いに集り、國子監九經李善道を以て洞主と為し、以て教授を主らしむ。保大中（南唐、九四三～九五七）、田を以て徵士史虛白に錫う。虚白は北海の人、地を廬山に避け、韓熙載其の用うべきことを薦め、元宗召して便殿に至り、訪うに國事を以てするも、辭して、漁釣の人、安くんぞ邦國の大計を知らん、と曰い、又殿上に醉溺すれば、元宗、真の處士なり、と曰う。因りて田を賜りて遺歸せしめ、仍りて其の租を免す。虚白死して、子孫租入に困しみ、

其の地を有する能わず、遂に他主に易(う)る。咸平五年(一〇〇二)、勅して重修せしめ、仍りて宣聖十哲の像を塑するも、今鞠して茂草と為る。³⁹⁾

とある。

陳舜俞、字は令拳、北宋の文人である。彼は歐陽修や蘇東坡、司馬光等と親交があり、よく白い牛に乗って江西の廬山を遊覧していたことから「白牛居士」と呼ばれた。「廬山記」に、「咸平五年、勅重修、仍塑宣聖十哲之像。」とあるように、咸平五年に皇帝の勅令により白鹿洞書院が再建され、昔と同じように宣聖と十哲の塑像を作ったのである。しかしながら、彼が見たのは荒廢した地であり、実際には書院の建物も宣聖と十哲の塑像も見なかった。

真宗の咸平三年(一〇〇〇)に作られた王禹偁の「潭州嶽麓山書院記」に「塑先師・十哲之像、畫七十二賢。；請關水田、供春秋之釋奠。」等とあったが、乾道元年(一一六五)に嶽麓書院を再建する際に張栻が書いた「嶽麓書院記」には十哲と釈奠に関する記述が一切なかった。白鹿洞書院の場合、「廬山記」は一〇七四年から一〇七五年の間に製作されたと思われる、陳舜俞が廬山を遊覧した際、書院の建築がなく、宣聖や十哲の像も残されていない状況を述べた。大中祥符年間(一〇〇八―一〇一六)と皇祐年間(一〇四九―一〇五四)の断片的な書院に関する記述から書院は何とか教學が続けている様子が窺えるが、祭祀の状況は不明である。その後、書院に関する記録は途絶えてしまい、淳熙六年(一一七九)に朱熹が書院を再建するまでの約一〇五年の間、荒廢したままの状態だったと考えられる。期間が短かったが、白鹿洞書院にも十哲の塑像が設置されたのは確かで、少なくとも北宋咸平年間(九九八―一〇〇三)まではあったと考えられる。もう一つ注目すべきは、朱熹によって再建された白鹿洞書院にあった礼殿は書院が落成してから二年後に出来たことである。十哲の像があつたことも、礼殿よりも先に書院があつたことも、嶽麓書院と同じということになる。

『江西通志』卷二二、書院二に、「淳熙」八年(一一八二)辛丑、浙東提舉に遷り、復た錢三十萬を遣わし、知軍錢聞詩に屬して禮殿・兩廡並びに塑像を建てしむ。後二年、知軍朱端章、板壁を加え、從祀の諸賢像を繪かしむ。⁴⁰⁾とあるように、白鹿洞書院が完成した翌年に礼殿と兩廡が建設され、塑像が作られ、さらに二年後、木壁に從祀の諸

賢人の絵が描かれた。

白鹿洞書院の礼殿と書院との位置関係については、「淳熙壬寅、文公浙東提舉に赴き、錢三十萬を以て後守錢閣詩に屬して（礼聖殿を）書堂の西に創建せしむ。」⁴¹という記載が残されている。つまり、白鹿洞書院の廟と学の位置関係は「左学右廟」となり、嶽麓書院の「前廟後学」ともまた異なる配置であることが判明した。

四 祭祀対象の変化

以上の考察で白鹿洞書院の礼殿には孔子と顔子の塑像があり、十哲の絵が描かれたことが分かった。北宋と違って、南宋の書院には十哲の像を置かなくなり、その代わりに絵を描くこととなったのである。また、孔子とともに顔子を積算することも変化し始める。

遡って淳熙六年（一一七九）に南康守となった朱熹が衰退した白鹿洞書院を建て直そうとした時点に戻ろう。史料には、「（淳熙六年）軍學教授楊君大法・星子縣令王君仲傑に屬して其の事を董せしむ。」⁴²とある。星子県令の王仲傑は書院再建の仕事を引き受け、翌年の三月に書院が完成されたことを先師に告げるため、積業の礼が行った。「白鹿洞成告先聖文」によれば、淳熙七年（一一八〇）三月十八日、白鹿洞書院が落成を迎え、朱熹は師生を率い、入学の儀式を行い、積業を行って先聖（孔子）とともに、先師兗国公（顔回）と鄒国公（孟子）を祀る対象としたということである。⁴³

北宋の書院では積業に関する記録はなかった。書院内に孟子を祭祀対象とするのも南宋に入ってから始めて加えられたことである。南宋の書院祭祀の内容と祀る対象は、確実に北宋と違ってきたことが分る。ただ官学の祀典に従うだけで独自性を持たなかった書院の祭祀はようやく自分の道を歩み始め、書院内で孔子と顔子以外に孟子を祀ることとなったのである。貞觀二年（六二八）に「聖孔師顔」の制度が確立され、貞觀四年（六三〇）に全国の地方官学で先聖孔子と先師顔回を祀ることが決まって以来、地方官学だけではなく書院もこの規制に従い、守り続けてきた。朱

熹は孟子を先師として祭祀対象に加えた理由を、「惟れ（鄒國）公は命世にして業を修め、克く聖傳を紹ぐ。」⁽⁴⁾と述べた。「命世修業」は、宋の張載『正蒙』の「顔淵は師に従い徳を孔子の門に進め、孟子は命世にして業を戦國の際に修む。此れ潜見の同じからざる所以なり。」⁽⁵⁾を踏まえたものである。『論孟精義』に、「顔子去聖人只毫髮間、孟子大賢、亞聖之次也」、「近思録」卷一四に、「孟子没而聖學不傳」とあるように、朱熹は孟子のことを尊敬した。顔子に続く聖人に近い者は孟子であると考え、孟子が亡くなって、聖學も伝わらなくなったと認識していたのである。したがって、白鹿洞書院に孔子と顔子以外に孟子を祀ることは朱熹の主張によるものなのである。

五 朱熹と福建の竹林精舎

朱熹が局面を変えた。白鹿洞書院での祭祀対象の変更は書院祭祀にとって革新的な行為だった。書院は朱熹の祭祀に対する構想が具体化できる場所となったのである。すなわち、書院はもはやただ単に儒學を伝授するだけの場所ではなくなり、道統を形にして儒學を傳承していくのに最も適した場所たらしめんとする期待が寄せられたのである。紹熙五年（一一九四）一二月、福建に帰った朱熹は新たに書院を造ろうとしたが、「書院」の名を付けずに「竹林精舎」と命名することにした。ここはいわば住居を兼ね自由に講學もできる私的な空間であり、規模が小さく家塾的なものだが、彼の思いが詰まった理想的な祭祀空間が実現できる「書院」であった。

書院の完成に伴い、竹林精舎の講堂で釈業を行った。主祀を孔子とし、配享を顔回・曾子・子思・孟子とした。そして、周濂溪・程明道・程伊川・邵康節・司馬溫公・張橫渠・李延平の七人が従祀として祀られている。『朱子語類』卷九〇、礼七、祭に、

新書院告成し、明日、先聖先師を祀らんと欲するに、古、釋菜の禮有り、約して行ふべくんば、遂に『五禮新儀』を檢べ、其の要を具える者以て呈せしむ。先生終日役を董し、夜歸れば即ち諸生と禮儀を斟酌す。雞鳴に起き、平明に書院に往き、廳事未だ備わらざるを以て、講堂の禮に就く。宣聖像、中に居り、克國公顔氏・邾侯曾氏・

沂水侯孔氏・鄒國公孟氏、西向して北上に配す。(並びに紙牌子なり。) 濂溪周先生(東一)・明道程先生(西一)・伊川程先生(東二)・康節邵先生(西二)・司馬溫國文正公(東三)・横渠張先生(西三)・延平李先生(東四) 従祀す。(亦紙牌子なり。) 並びに地に設く。⁴⁶⁾

とある。あえて塑像を置かずに「紙牌子」にしたのは、当時通行の『政和五礼祭祀新儀』に矛盾や疑問を感じ、『周礼』・『儀礼』・『開元礼』等の古礼から模索や推敲を繰り返しながら捻出した改善案の試行であり、かつて白鹿洞書院で孔子と顔子の塑像を造らずに位牌を置くという提案が周囲に反対され、やむを得ず妥協して塑像を造ったことで味わった屈辱感を払拭するためでもあった。

祭祀対象に関しては、配享を白鹿洞書院で祀った顔子と孟子のほか、曾子と子思を加えた。その理由については、「恭しく惟うに、道統、遠くは羲軒自り、厥の大成を集むるは、允に元聖(孔子)に屬す。古を述べ訓を垂れ、萬世程を作り、其の徒を三千にし、化すること時雨の若し。維⁴⁷⁾だ顔(顔子)・曾(曾子)氏、傳えて其の宗を得、思(子思)及び興(子輿||孟子)に逮び、益ます以て光大なり。」と述べる。これこそは、朱熹が最初に考案した道統の基本構図に他ならない。

従祀の対象には北宋の道学の創始者とされ北宋五子とも呼ばれる周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載と司馬光の六人が充てられ、さらに、朱熹は自分の師である李侗を加えた。熊禾はこれに対し、

文公、六君子を贊ずるは、乃ち其の一時の先哲を景行するの盛心にして、竹林の祠、延平先生を増して七賢と為すは、又以て其の平生師傅を尊敬するの意を致すなり。⁴⁸⁾

と述べる。北宋の思想學術を代表する先哲を景仰する心と自分に学問を教えた師を尊敬する意を祭祀によって表すということである。朱熹が提言したこの書院祭祀から「道統」と「師道」の二つの要素が備えられることになり、彼が考えた道統の理想図が完成することとなる。

孔子を中心とする従来の儒学を伝承するメンバーと北宋五子・司馬光に始まり南宋の朱熹に至るまでの新しい儒学とを結合して一つの道統が完成された。しかしながら、この朱熹が考えた道統はあくまでも私的な見解に過ぎず、官

学が絶対的に従わなければならない国家の祀典であることは異なり、誰しも同様に課される義務ではない。例えば、先聖先師十哲を祭祀対象とする元代に造られた儒林書院（湖南）^⑤は、旧制度に従い孔子とその弟子を祭祀する。また、『重修嶽麓書院図志』^⑥巻之一にある「道統図」を見ると、「孔子―曾子―子思―孟子…」となっており、顔子が抜けていることが分る。図の次に収められた「聖学統宗」には、この「道統図」の論拠として「孔子没、曾子獨得其傳、傳之子思…」と明記する『宋史』道学伝冒頭部分が引用されており、明代の嶽麓書院では顔子は道統に入れられておらず、祭祀対象とされていなかったことが分かる。朱熹が行ったように信奉実践する学問と人物を祭祀対象にすれば、同じ志を持つ者が集まり、学派が形成される。書院で行う祭祀が信奉する学問の伝承ルートを明示する働きを持つことは確かである。

北宋の書院は官学が持つ祭祀機能が附与されると、学校として展開した。つまり、祭祀とは官学と書院の両者の間に立つ「媒介」だったのである。書院が学校として成り立つ最大の理由は官学から祭祀機能を分与されたからである。書院にとって祭祀は重要な機能であり、官学が依拠する国家祀典と干渉しあいながら形を変えていくが、その変革の最大のもは朱熹によってもたらされた。換言すれば、書院祭祀は朱熹によって独自性を持ち始めたのである。そして、朱熹が主張する「道統」^⑦「四配」（顔子・曾子・子思・孟子の四人を配享として祀る）の祭祀はやがて朝廷に認められ、官学に採用されることとなり、^⑧また、それぞれの学派と関係する人物を祀る対象にすることと、書院で自分の師を祀ることとは、書院祭祀の特徴となるのである。

〔注〕

〔1〕鄧洪波『中国書院史』（台北、台湾大学出版中心、二〇〇五年）「書院的基本規制與六大事業」、二〇一頁を参照。

〔2〕高明士「隋唐廟学制度的成立与道統的關係」（『国立台湾大学歴史学系学报』九、一九八二年）の九三頁に基づく田中俊行「中国教育行政史研究―国子監成立史における教育行政の独立について」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』三八、一九九八年）における「廟学制」に対する解釈。

- (3) 高明士「中国中古的教育与学礼」(台北、台湾大学出版中心、二〇〇五年)、六〇・六一頁を参照。
- (4) 高明士「廟学与東亜伝統教育」(『唐研究』第一〇卷、北京大学、二〇〇四年)、二二七～二五六頁。
- (5) 高明士「中国中古的教育与学礼」、六二・六三頁を参照。
- (6) 高明士「中国中古的教育与学礼」、六三頁。
- (7) 高明士「中国中古的教育与学礼」、六三頁。
- (8) 唐 長孫無忌等「隋書」(北京、中華書局、一九七三年) 卷九、礼儀志四、「隋制、國子寺每歲以四仲月上丁釋奠於先聖先師、年別一行鄉飲酒禮。州郡學則以春秋仲月釋奠、州郡縣亦每年於學一行鄉飲酒禮。」
- (9) 元 徐碩「至元嘉本志」(『四庫全書』文淵閣本、景印『文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、一九八六年) 卷七、学校、「廟以崇先聖、學以明人倫。郡邑廟學、大備於唐。」
- (10) 唐 王涇「大唐郊祀錄」(適園叢書所收本、北京、民族出版社、二〇〇〇年) 卷一〇、文宣王廟、「其廟在長安子城安上門街道東務門坊。洛陽在長樂坊。其廟屋四柱七間、前面兩階、堂高三尺五寸、宮垣周之。南面一屋三間、外有十戟焉。東面一屋一門。其大學講論之堂、在廟垣之西。」
- (11) 高明士「中国中古的教育与学礼」、六六頁。
- (12) 高明士氏の論によると、「左廟右学」というスタイルを採用した理由は不明だが、恐らく「周礼」の「左宗廟、右社稷」に基づいたと推測される。それは陳黎氏が「左を尚び、南向するを正禮と為す。(尚左、南向為正禮。)(賈公彦疏)を踏まえて提出した「尊貴者は南向し左を上位とするのが正式の礼であり、周制に発する。(尊者南向、上左、是為正禮、源於周制)」とする説に賛同してのものである。高明士「中国中古的教育与学礼」、六六頁を参照。
- (13) 李正宇「古本敦煌郷土志八種箋証」(台北、新文豐出版、一九九八年) 附載「古本敦煌郷土志影本(八種)、四〇三頁、「州学／右、在城内、在州西三百步。其學院内、東廂又先聖太師廟、堂内有素先聖及先師顔子之像。春秋二時奠祭。／縣学／右、在州学西、連院。其院中東廂有先聖太師廟、堂内有素先聖及先師顔子之像。春秋二時奠祭。」
- (14) 宋 李靖德編「朱子語類」(北京、中華書局、一九八六年) 卷九〇、礼七、祭、「問、大成殿又却在學之西、莫是尊右之義否。

曰、未知初意如何、本朝因仍舊制、反更率略、較之唐制尤沒理會、唐制尤有近古處、猶有條理可觀。」

- (15) 高明士「中国中古的教育与学礼」、六六・六七頁、「唐・宋廟位不同、或許正說明兩代尊尚之差異、然以廟之所在為尊、則無二致。學校園地以廟之所在為尊、正說明學校的中心地置於聖廟。直至今日、台灣所見的傳統學校(含書院)、猶以廟之所在為尊、韓國・日本所見亦同。」

- (16) 「潭州岳麓山書院記」は王禹偁の詩文集『小畜集』に載る碑記である。王禹偁、字は元之、北宋の文人である。「潭州岳麓山書院記」の最後に「大宋咸平三年某月日記」と書かれていることから、この碑記は宋の真宗の咸平三年(一〇〇〇)に完成されたものと思われる。

- (17) (宋) 王禹偁「潭州嶽麓山書院記」、「小畜集」卷二七(『四庫全書』文淵閣本)、「諸生逃解、六籍散亡、弦歌絕音、俎豆無觀。」
- (18) (宋) 王禹偁「潭州嶽麓山書院記」、「塑先師・十哲之像、畫七十二賢、華衰珠旒、縫掖章甫、畢按舊制、儼然如生。請關水田供春秋之釋奠。」

- (19) (唐) 玄宗勅撰「大唐六典」(広池千九郎校注・内田智雄補訂、一九七三年刊行「広池本」影印本、西安、三秦出版、一九九五年) 卷四、祠部郎中、員外郎、「凡祭祀之名有四。一曰祀天神、二曰祭地祇、三曰享人鬼、四曰釋奠于先聖先師。」

- (20) 『大唐六典』卷四、祠部郎中、員外郎、「凡州縣皆置孔宣父廟、以顏回配焉、仲春上丁州縣官行釋奠之禮、仲秋上丁亦如之。」

- (21) (元) 脱脱等『宋史』(北京、中華書局、一九八五年) 卷九八、礼志一、「撰『開寶通禮』二百卷、本唐『開元禮』而損益之。」

- (22) 『朱子語類』卷八四、「論後世礼書」、「開寶禮」全體是「開元禮」、但略改動。」

- (23) (唐) 蕭嵩等「大唐開元礼」(北京、民族出版社、二〇〇〇年) 卷第一、序列上、神位、「仲春仲秋上丁釋奠於太學。孔宣父為先聖、顔子為先師。(冉伯牛…(中略)…范甯等從祀) 右新加七十二弟子之名、餘準舊禮為定。」

- (24) 同右卷六九、吉礼、諸州稟奠於孔宣父、及び卷七二、吉礼、諸稟稟奠於孔宣父ともに、「本師師掌事者、設先聖神席於堂上西楹間東向、設先師神席於先聖神席東北南向、席皆以莞。」とある。

- (25) (元) 脱脱等『宋史』卷一〇五、礼志八、文宣王廟、「至聖文宣王唐開元末升為中祠、設從祀、禮令攝三公行事。朱梁喪亂、從祀遂廢、後唐長興二年、仍復從祀、周顯德二年、別營國子監置學舍。宋因增脩之、塑先聖亞聖十哲像、畫七十二賢及先儒二

十一人像于東西廡之木壁、太祖親撰先聖・亞聖贊、十哲以下命文臣分贊之。」

(26) 『宋史』卷一〇五、礼志八、文宣王廟、「熙寧祀儀」十哲皆為從祀、惟州縣釋奠未載、請自今二京及諸州春秋釋奠、並準「熙寧祀儀」詔封孟軻鄒國公。」

(27) 王禹偁「崑山昇新修文宣王廟記」、「小畜集」卷一六、「乃像素王被華裘垂珠旒王者之制彰矣、乃狀十哲冠章甫衣縫掖儒者之服備矣、廟之興也、既如彼像之設也、又如此粵上丁之晨、行釋奠之禮。」

(28) 乾興元年（一〇二二）以降、朝廷はようやく地方官学の設立を許可した。また北宋官学の分布について調査した結果、大中祥符四年（一〇二一）前に設立された地方官学はただ十四箇所しかない。地方官学は殆んど江西・安徽・浙江・江蘇・広西等の地域に集中して、湖南地域は衡州の州学一箇所のみとなる。李兵『書院教育与科挙関係研究』（台北、台湾大学出版中心、二〇〇五年）、三八～三九・四二頁を参照。

(29) 『論語』（十三經注疏）、中華書局、一九八〇年）先進篇、「從我於陳蔡者、皆不及門也。德行、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有・季路。文學、子游・子夏。」

(30) (唐) 李元瓘「顔子当設坐像並升四哲奏」、(清) 董誥等編『全唐文』（北京、中華書局、一九八五年）卷三〇四所収。(宋) 王溥『唐会要』（上海、上海古籍出版社、一九九一年）卷三五、「褒崇先聖（先師已下附）」、『全唐文』に載るのは全文である。『通典』（中華書局、一九八四年）卷五三、「孔子祠」、「旧唐書」（中華書局、一九七五年）卷二四「礼儀志」及び『新唐書』（中華書局、一九七五年）卷一五「礼樂志」等が載せるのは節略したものである。

(31) 『唐会要』卷三五「学校」、「顔回等十哲、宜為坐像、悉令從祀。曾參大孝、德冠同列、特為塑像、坐於十哲之次、因圖書七十弟子及二十一賢於廟壁上、以顔子亞聖親為製贊書於石、仍令當朝文士分為之贊題其壁焉。」

(32) 『旧唐書』卷二四、礼儀志四、釈奠、「圖形於壁、兼為立贊、庶敦勸儒。」

(33) 『宋史』卷一〇五、礼志八、文宣王廟の項を参照。

(34) 『旧唐書』卷二四、礼儀志四、釈奠、「自今已後兩京國子監夫子皆南面而坐、十哲等東西列侍、天下諸州亦准此。」

(35) (清) 趙寧纂修『長沙府嶽麓志』（清康熙二十六年鏡水堂本影印、『中国歴代書院志』四、一九九五）卷之三、「旧志聖廟図説」、

「宋初僅有書院，至乾道時劉安撫於書院前始創禮殿，中肖闕里聖賢像，列繪七十子，前為泮池，苑門，櫺星門，自是晦菴先生更建書院如舊制，而禮殿則五間也。」

(36) 『長沙府嶽麓志』卷之三、「旧志聖廟圖說」、「乾道改元湖南安撫劉琪創新院為屋五十楹，內設禮殿，肖聖像，加藏書閣。」

(37) (宋) 張栻『嶽麓書院記』、『湖広通志』(『四庫全書』文淵閣本)卷一〇六、藝文志、記、「為屋五十楹，大抵悉遷舊規，肖闕里先聖像於殿中，列繪七十子，而加藏書閣於堂之北。」

(38) 『長沙府嶽麓志』卷之三、「書院沿革(旧志)」、「紹熙五年，晦菴安撫湖南，興學嶽麓，更建書院於爽塏之地，前列禮殿，泮池，後有百泉軒，堂室二層約百間。」

(39) (宋) 陳舜俞『廬山記』(『四庫全書』文淵閣本)卷三、「南唐昇元中，因洞建學館，畧田以給諸生，學者大集，以國子監九經李善道為洞主，以主教授。保大中，以田錫徵士史虛白。虛白北海人，避地廬山，韓熙載薦其可用，元宗召至便殿，訪以國事，辭曰漁釣之人，安知邦國大計，又醉溺殿上。元宗曰，真處士也。因賜田遺歸，仍免其租。虛白死，子孫困於租入，不能有其地，遂易他主矣。咸平五年勅重修，仍塑宣聖十哲之像，今鞠為茂草。」

(40) 『江西通志』(『四庫全書』文淵閣本)卷三二、書院二、「八年辛丑，遷浙東提舉復遺錢三十萬，屬知軍錢聞詩建禮殿，兩廡并塑像。後一年，知軍朱端章，加板壁，繪從祀諸賢像。」

(41) (明) 鄭廷鵠『白鹿洞志』(明嘉靖刊本，『白鹿洞書院古志五種』上，一九九五年)卷之二、書院沿革，大成殿、「淳熙壬寅，文公赴浙東提舉，以錢三十萬屬後守錢聞詩創建於書堂之西。」

(42) (宋) 呂祖謙『鹿洞書院記』(清) 毛德琦『白鹿書院志』(清康熙刊本，『白鹿洞書院古志五種』下，一九九五年)卷二二、「屬軍學教授楊君大法，星子縣令王君仲傑董其事。」

(43) (宋) 朱熹『白鹿洞成告先聖文』、『晦庵集』(『四庫全書』文淵閣本)卷八六、祝文、「淳熙七年歲次庚子三月癸丑十八日，(中略)：敢率賓佐合師生，恭修釋菜之禮，以見於先聖，以先師堯國公先師鄒國公配尚饗。」

(44) (宋) 朱熹『白鹿洞成告先師文』、『晦庵集』卷八六、祝文，「鄒國命世修業，克紹聖傳。」

(45) (宋) 張載『正蒙』、『張子全書』(『四庫全書』文淵閣本)卷三、三十篇第十一、「顏淵從師進德於孔子之門，孟子命世修業於

戰國之際。此所以潛見之不同。」

(46) 『朱子語類』卷九〇、礼七、祭、「新書院告成、明日欲祀先聖先師、古有釋菜之禮、約而可行、遂檢五禮新儀、令具其要者以呈。先生終日董役、夜歸即與諸生斟酌禮儀。雞鳴起、平明往書院、以廳事未備、就講堂禮。宣聖像居中、兗國公顏氏・鄆侯曾氏・沂水侯孔氏・鄒國公孟氏西向配北上。(並紙牌子) 濂溪周先生(東一)・明道程先生(西一)・伊川程先生(東二)・康節邵先生(西二)・司馬溫國文正公(東三)・橫渠張先生(西三)・延平李先生(東四) 從祀。(亦紙牌子) 並設於地。」

(47) (宋) 朱熹「滄洲精舍告先聖文」、「晦庵集」卷八六、祝文、「恭惟道統、遠自羲軒、集厥大成、允屬元聖。述古垂訓、萬世作程、三千其徒、化若時雨。維顏・曾氏、傳得其宗、逮思及輿、益以光大。」

(48) (宋) 朱熹「滄洲精舍告先聖文」に、「時厥の後自り、口耳、真を失ひ、千有餘年にして、乃ち繼有りと曰う。周程授受して、萬理原を一にし、邵と曰い張と曰いて、爰に司馬に及ぶ。學、轍を殊にすと雖も、道は則ち歸を同じくす。(自時厥後、口耳失真、千有餘年、乃曰有繼。周程授受、萬理一原、曰邵曰張、爰及司馬。學雖殊轍、道則同歸。)」とある。

(49) (宋) 熊禾「三山郡泮五賢祠記」、「勿軒集」(『四庫全書』文淵閣本) 卷二、記、「文公贊六君子、乃其一時景行先哲之盛心。而竹林之祠、增延平先生為七賢、又以致其平生尊敬師傅之意。」

(50) 『湖広通志』(『四庫全書』文淵閣本) 卷一〇七、藝文志、記、元、に、「儒林書院記」がある。

(51) (明) 陳論「重修嶽麓書院図志」十卷。(万曆二十二年(一五九四) 刊本、台湾国家図書館蔵)

(52) 吾妻重二「朱熹の釈奠儀礼改革について——東アジアの視点へ」(『東アジア文化交渉研究』四、関西大学文化交渉学教育研究拠点、二〇一一年) を参照。